

甲状腺外科草子 59

気楽で軽い本 3：冒険小説

杉野 圭三

軽い冒険小説

数ある冒険小説の中で古典物の「オデュッセイア (ホメロス)」、「アーサー王物語 (ブルフィンチ)」、「三銃士 (A・デュマ)」、「アイヴァンホー (スコット)」などは別の機会とする。

冒険小説マニアにとって聖書とも言うべき「深夜プラス1 (ギャビン・ライアル)」もあまりにも有名なので割愛し、軽く読める肩の凝らない本を挙げる。



最後の国境線

アリスティア・マクリーン (1922-1987) の代表作が「女王陛下のユリシーズ号」であることに異論はない。ソ連行の輸送船団を護衛するユリシーズ号と指揮官ヴァレリー艦長の迫真に満ちた描写は高く評価されるが、余りにも重い。他の作品では映画化された「ナヴァロンの要塞」、「荒鷲の要塞」、「黄金のランデヴー」などの軽い小説も多い。

この本は比較的初期のものだが、登場人物の設定とスピード感がよく、マクリーンの最高傑作であることを請け合う。



原生林の追撃

デズモンド・バグリュイ (1923-1983) は「ゴールデン・キール」、「高い砦」、「マッキントッシュの男」などで有名である。



「原生林の追撃」の原題は”Land slide”、記憶を失った地質学者が主人公で、謎解きを

含んだ冒険と洒落た会話などの構成が面白い。
脱出航路

ジャック・ヒギンズ (1929-2022) は「鷲は舞い降りた」、「死にゆく者への祈り」など著作が多すぎて困る作家である。



この小説では魅力的なドイツ軍人が登場する。ヒギンズの描くドイツ軍人は勇敢でウィットに富む洒落た紳士が多い。キザなセリフを吐き、連合国の軍人より魅力的に描かれている。「勇者たちの島」、「大統領の娘」などの軽い本も多く気楽に読める。



タイタニックを引き揚げろ

クライブ・カスラー (1931-2020) の初期作品はどれも重厚で素晴らしいものがある。特にこの作品は重厚なミステリー調で、大絶賛された。しかし、以後の「ダーク・ピット」シリーズが大ヒットしすぎたため、徐々に007風の薄い作品となったことは残念である。

レッド・オクトーバーを追え

トム・克蘭シー (1947-2013) もこの作品を含む初期作品は重厚であった。「レッド・オクトーバーを追え」は映画化もされ大ヒットした。その後のトム・克蘭シーの作風変化もクライブ・カスラーと同様である。

ヴァチカンからの暗殺者

A・J・クィネル (1940-2005) は正体不明の覆面作家として「燃える男」などを発表してきた。この作品はヴァチカンからのソ連指導者暗殺命令を扱った傑作冒険小説である。

暗殺者グレイマン

マーク・グリーニーによる正体不明の「グレイマンシリーズ」はロバート・ラドラムの「ジェイソン・ボーン」シリーズよりも軽く単純な所がお勧めである。

まだまだ、キリが無いのでここまでとする。

(一甲状腺外科医の徒然なる随想)

2023年3月8日